

「国民的一大行事お盆」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

間もなく月遅れのお盆がやって来る。この時期になると正月の時期同様決まって「国民的大移動」といわれるように、郷里に帰る人々によって鉄道や飛行機、高速道路等が大混雑をきたす。お盆は正月とともに日本人にとって大切な先祖の霊を迎える行事だからである。

もともと盆行事は、旧暦で行われた。旧暦七月朔日が盆行事開始の日で、七日の七夕の日は墓掃除をする等準備の日で本番は三日から十六日まで。現在はひと月遅れの八月に盆行事を行っている所が多い。



十文字で  
青竹等を燃やす  
佐野市牧

い。

八月十三日は迎え盆である。午前中、仏壇とは別な所に盆棚を作る。宇都宮辺りでは、茶の間の縁側よりの所に作る場合が多い。棚を設置し、その前方に麻がらで鳥居型を作る。棚の奥に位牌を並べ、前方に香炉、鉦、花瓶に刺さした花等を置く。真ん中にはマコモ莫座を敷き、その上に蓮の葉や里芋の葉を置き、スイカや馬の形に足を付けたナス、キュウリ、あるいはトウモロコシ、朝夕のご馳走等を供える。鳥居型にはワカメ、ホウズキ、素麺等を吊るす。

夕方、家族そろって提灯、線香、花、水等を持って墓地に先祖様を迎えに行く。墓地から帰る時、提灯に火をともし、「先祖様迎えに来たよ」等といい、背負う真似をしたもので、家についたら「どういしょ」といって下す真似をしたものである。

十四日・十五日は盆の中日で、親戚縁者がそれぞれの家へ

線香上げに行く。各家ではご馳走を作り線香上げに来る客を迎えるが、「盆にぼた餅、お昼にうどん、夜は米の飯にトウナス(カボチャ)汁よ」と、ぼた餅やうどんを作り客に振る舞ったものである。また、県南地方では、一家の主が「盆様の野回り」と称し、先祖様を背負う真似をして自家の田畑をめぐる風習があった。なお、中日には寺の境内や広場等に櫓を築き老若男女が集まって盆踊りをする風習は今でも広く行われている。十六日は送り盆である。午前中に盆棚を片付け、盆の供え物をマコモ莫座に包んだものを持参して墓参りに行く。鹿沼市栗野や佐野市牧では、墓地に行く途中の十文字で鳥居型に用いた青竹やマコモ莫座に包んだ盆の供え物を燃やす。

この時に青竹の割れる音がしたら盆様が無事あの世に帰ったとされる。



盆棚飾り  
市内下砥上

以上は宇都宮および周辺地域における大まかな盆行事の様子である。

さて、日本人がなぜ祖霊に対する信仰を持ったのであろうか。それは水田稲作を中心とする農耕と関係深い。農耕は先祖代々同じ場所で行われてきた。その技術も先祖たちによって生みだされ引きつなされてきた。先祖の霊に対する畏敬の念が生じるのは自然の成り行きである。また、お盆になると本家に一族が集まるのは、農耕、とりわけ稲作が、多くの人々の協力を必要としたことによる。一族は同じ組内に住む隣人とともに協力を得やすい集団であった。

科学が発達し合理的な考え方が広まったとはいえ、千年以上の長きにわたって日本人の心に埋め込まれた祖霊信仰は簡単には消えない。今後も各地に根差した盆行事は続けられて行くであろう。